幽霊をめぐって

登田祥子

三遊亭円朝の長編落語「怪談牡丹燈籠」は怪談性を含む人情噺である。今回はその怪談性に注目し、落語としてではなく、怪異譚と位置付け、お露の幽霊像を他の演劇や読み物に登場する女性幽霊と比較しながら特徴や面白さをみていきたい。

第一章では室町時代に大成した夢幻能と江戸時代に爛熟期を迎えた歌舞伎を取り上げた。夢幻能には本鬘物と鬼女物の二種類の幽霊像がある。本鬘物には、恋人や夫を慕って現れた女性幽霊が、僧に供養を頼み、成仏できるように願って消える心穏やかで優しさがある。鬼女物には人間に裏切られた怒りから大蛇や怨霊に変身してその人を襲い、殺そうとする大変荒々しく攻撃性の強い幽霊が現れる。しかしまだこの頃は、女性幽霊が人間を襲っても命を奪ってしまう前に退散させられているので、復讐をやり遂げる演出までは行われていなかった。

江戸時代、化政期の歌舞伎では四世鶴屋南北の二作品を例にみると、こちらは女性が死ぬ間際から既に怨霊になることを予感させ、死後復讐をやり遂げる。この場面では恨みの限りを尽くした言葉や生血、人骨など、気味の悪い演出がふんだんになされている。夢幻能に比べると、残忍さが過激であるとも、写実すぎるともいえる。

第二章は幽霊除けと言えば、よく利用される護符と幽霊の関係についてである。

（1）では中国明代の伝奇小説『剪灯新話』「牡丹灯記」、これを日本で翻案した近世の『伽婢子』「牡丹燈籠」、円朝の創作落語「怪談牡丹燈籠」を取り上げた。女性幽霊が人間の男性を慕って通うものの、正体発覚後は護符を貼られて会えなくなり、しばらくたて護符の効き目が失われた時、所で恋人を殺してしまう。

この三話に共通しているものが護符であるので、その効力に注目した。前者二話では護符を貼ってから幽霊は全くその家に近づかなかった。落語では毎晩やって来るが、その度に護符に阻まれていた。屋内にいる間はこの効力が十分に発揮されていることが分かったので、他にもこれに類似する話を探した。『今昔物語集』・『平仮名本・因果物語』・『御伽百物語』・『太平百物語』などに幽霊が護符一枚にも恐れを感じ、寄り付かない話があった。説話や怪談集の中にこのような話が取り入れられているということは、護符の使用はもっと古くから行われており、生活に身近なものとしてとけ込んでいたといえる。

（2）では護符がいつ頃からどのような意図の下で使用され始めたかについてである。桜井徳太郎氏は、霊を各自の生活空間から追い払うために古代から行われているという説を上げている。具体的には霊病の治療や生産の増大を祈願して使われていた。

効力の高い護符を授けてくれる人物に目を向けると『剪灯新話』をはじめとして彼らはみんな多くの修行を積み、不思議な能力を身につけた人物ばかりである。日本における彼らの原点は、平安時代から始まる呪術的山岳信仰にたずさわる山伏（修験者）達である。彼らは修行で身につけた呪術的力を庶民の生活に役立てる一方、信者を霊山に招いて信仰を高めていた。こうすることによって双方の間に護符を通して信頼感が生まれ、より一層身近に使われるよ

うになる。また近世における護符は現世利益の思想からではないかと考え、江戸庶民の参詣や巡礼について調べてみた。

（3）では護符以外に幽霊除けとして、何が用いられているのかを探してみた。『源氏物語』『今昔』では米を撒いていた。『諸国百物語』では物忌みをし、『西鶴諸国ばなし』では刀を使い、『太平百物語』ではお経を読み、『宿直草』や「耳なし芳一のはなし」では経文を体中に書いて幽霊除けにしていた。

護符を貼ることも含め、これらの行為は手軽にできるものである。現代でも日常生活を顧みると、この風習の名残りと思われるものがある。

第三章では護符を貼られた女性幽霊がとった行動（人間の男性を殺すこと）の理由とその対象について考えた。

まず『剪灯新話』・『伽婢子』・「怪談牡丹燈籠」に登場する女性幽霊を例にとると、彼女達は正体がばれ、護符を貼られてからも恋人に会いたがっていた。そして護符の効力がなくなった時に彼を捕まえて殺してしまう。これは恨みから殺したというよりも、現世の恋人に執着し、独占したいと思う愛情が過剰表現された結果、自分のいるあの世に連れて行ったと考えられる。彼女達の心情は怨霊ではなく、能の本鬘物の霊に近い。

二つ目には『諸国百物語』を例にして、愛情もあったが男性に裏切られることにより嫉妬し、憎しみや怒りから生じた復讐心の方が勝っていたからではないかと考えた。これは一般的によく言われるように復讐心から怨霊になった女性幽霊に代表される心情である。復讐に至るまでの心情の変化は女性から男性への独占的愛情があったものの、それを裏切られることで喪失し、その悲しさと悔しさが男性を襲う行為へつながる構図として表すことができる。

次に幽霊の復讐対象者だが、これは怪談集の年代が下るにしたがって増える傾向にある。最初の頃は、後妻打ちと

言われるように後妻のみであったが、次第に夫へ、そして夫と後妻との子供へと及んでいく。中でも先妻に限らず、下女の幽霊は主に無実ながら殺された怨みから、子孫代々に渡り祟り続ける。こうして復讐対象者が増えるのは、人々が更に恐怖を楽しむために、過激化していった結果であると共に女性の怨みはそれをいだかせた相手のお家断絶、子孫滅亡までつきまとう大変執念深いものだということを示すことでもある。

第四章では幽霊に絶対的な効力がある護符を貼るにもかかわらず、それに守られない話があることに注目し、それはなぜなのかを考えた。そして死後の供養が不十分だから、護符の効力が及ばない時や場所で襲われたから、幽霊の執念が何か他のものに転化されなかったから、護符の役割が自己中心的人間側の護身のためで、内向的利用法だったからではないかと、四つの理由を例話を引きながらあげた。

お露は長編落語に登場する幽霊であるので、第五章では短編落語の幽霊像と比較するために「三年目」・「茶漬幽霊」・「皿屋敷」の三席を取り上げた。短編落語に登場する女性幽霊は、私達が幽霊の観念として持っているものからずれている。例えば昼間に出て来たり、病気になる。とても人間の感覚に近いため、幽霊らしく恐怖の対象になることはない。また亡妻が亭主に会いたくなって現れる場面は愛情一心だったお露と同様で、死後も慕い続けているところなどは能の本髪物の主人公に近いものがある。

最後に「怪談牡丹燈籠」の面白さである。私は創作上の巧みな場面展開ももちろんだが、それに加えて既に世に出ていた『剪灯新話』をはじめとした怪談の読み物や歌舞伎『東海道四谷怪談』などを基盤にした影響も大きいと思う。この噺は単独で落語界に生まれたのではない。読み物や演劇の世界の要素を集約したところに存在しているのである。終始恐怖を実感させ過激化が進む怪談と、人間味をそのまま残し滑稽に作り出された怪談の間で、どちらの要素も取

り入れながら、どちらかに偏ることのない幽霊像が現れている。

単に創作時にこれらから構想を得たからというだけではない。落語は噺家が話すのを聞きながら、寄席の観客一人一人が情景や表情を想像していくところが楽しいのである。この想像力を働かす基になるのが怪談を読んだ時に感じたことであり、歌舞伎で見た演出であろう。だから一連のパターン化した筋の展開でも、何度も聞くと想像力が豊かになり、また本や歌舞伎の場面を思い出しながら、合わせて楽しめるので面白味が増すのである。